

## ワルソウでの COSPAR 会議

畑 中 武 夫\*

私は、6月1日アムステルダムからポーランド航空の双発プロペラ機で、東ベルリンを経てワルソウへ向った。東ベルリンの飛行場はまだ完成していなく、さして大きくもない待合室はガラソとしていた。

飛行機がワルソウに近づくと、私の隣席にいて、それまで黙っていたポーランド人が、「ワルシャワ！」と叫んで私に市街をみよと指さした。目についたのは、ひときわ高くそびえる『文化と科学の宮殿』であった。

☆ ☆ ☆

ワルソウは調和のとれた街である。この大戦中にドイツ軍に占領され、市のかなりの部分が破壊されたのだ。それを、むかしの絵に従って、戦前のように再建しているのである。

特に印象深かったのは、市のやや北よりにある『旧市内』という一廓であった。ここは、400年くらい前に、ワルソウがはじめてポーランドの首都になった時以来栄えたところであるが、ドイツ軍に徹底的に破壊されたのを、それこそむかしの絵画をもとにして、17世紀風に再建したのである。建物の内部は近代になっているそうだが、外観は全く17世紀風である。

調和のとれた街並みと、街路樹の多いこと、そして歩道がかなり広いところは、すこしオーバーにいえば、パリのシャンゼリゼの縮小版である。そこへソ連が、戦後『文化と科学の宮殿』という、モスクワ大学の小型のような、塔のつき出た建物をたてたのだ。わが国のあるジャーナリストの言を借りると、

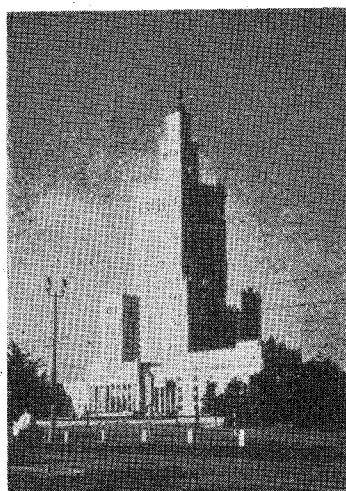
「ワルソウの街は美しい。そして特に、『文化と科学の宮殿』からの眺めがいちばんよい。なぜなら、そこからは『宮殿』が見えないから」

私たちの会議(COSPAR)は、この『宮殿』で行なわれた。

☆ ☆ ☆

「ポーランドは矛盾と撞着の国のようである。われわれは共産圏に属する。けれどもポーランド人のうちの数百万人はカトリック教徒である。われわれは近代建築をこのむけれどもわが首都をふるい絵画にもとづいて、むかしの姿に築き上げている。われわれの給料は低い。けれどもいまだ餓死したものはいない。旅券をとることはきわめて困難である。けれども数十万のポーランド人は、毎年外国へ旅行している……」

これはこの会議の開会式に、地元の組織委員長である



第1図 文化と科学の宮殿

天文学者ゾン教授が、詩を暗誦するように英語でのべた、開会の辞の一節である。私は特に請うてこのコピーをつくってもらったが、あとで聞くと彼はただ2通だけコピーをつくり、1通をアメリカ代表に、他の1通を私にくれたのだそうである。

☆ ☆ ☆

なるほどカトリックはきわめて盛んなようである。

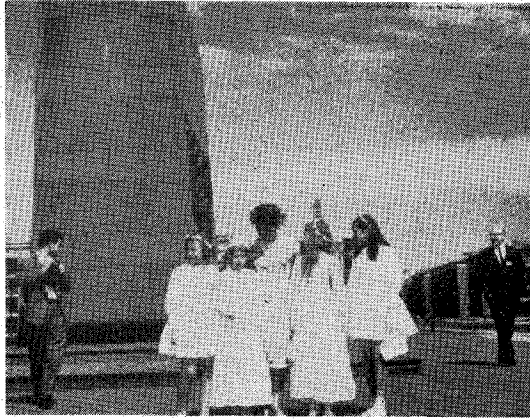
街には多くの教会がある。私たちが日曜日にバスで市内見物をしたとき、たまたまお昼頃ある教会の前を通ったら、礼拝をすませた男女がおびただしく教会から出てきた。それが決して老人たちだけではないのである。

またその同じ日のすこし早い頃には、はじめての聖体拝受をするのであろうか、長い白いドレスをきたかわいらしい少女たちに出あった。



第2図 17世紀風に再建された『旧市内』

\* 東京大学理学部天文学教室及び東京天文台



第3図 『ワルソー・ゲットー』の記念碑の前で(中央の人物はマセヴィッチ・ソ連代表)

ことに、ユダヤ人を虐殺したので有名な『ワルソー・ゲットー』の場所を訪れたとき、その記念碑のところには何人かのこのような少女がいた。私たちは思わずカメラのシャッターを切ったのだが、考えてみれば、何ともいえないような奇妙な対照であった。

また会議が終わった翌日、私は午後の飛行機に乗ったのだが、午前中はワルソウの海外放送のための録音をたのまれて、ホテルで待っていたとき、下の街を、大きな旗をもった行列がいくつも続いた。それは6月13日のことで、キリストの昇天のお祭りの日であるという。僧服の人々の他に平服の男女が多く続き、讚美歌をうたいながらゆっくりとパレードした。この日は国全体の休日であった。

☆ ☆ ☆

ポーランド人の誇る人物はコペルニクスとショパンである。

ショパンの生家には行かなかったが、ワルソウの市内のある公園には、池のそばにショパンの大きな銅像がある。そしてその像の下で、日曜日ごとにショパンの曲の野外演奏がある。私たちがそこを訪れたとき、多くの市民が昼のひとときを、ベンチの上でピアノに耳をかたむけていた。

ポーランドの人々は特に音楽を好むようだ。ワルソウの街のレストランでは、夕方になるとたいてい音楽が始まる。あるところはピアノだけ、あるところは数人のバンドであったが、曲の大半は、中年の私にとっての「なつかしのメロディー」であった。その甘いしらべに乗って、市民たちはゆっくりと踊っていた。ツイストなどには全く出会わなかった。

音楽のあるところでは勘定が10%くらい高くなる。

☆ ☆ ☆

会議の内容も少しは紹介しなければならない。

COSPAR, つまり Committee on Space Research は、

毎年総会を開き、同時にシンポジウムを行なう。総会は今回が6回目、シンポジウムは遅れて始まったので今回が4回目である。昨年はアメリカのワシントンで開かれた。来年は、ガリレオの生誕400年を記念して、イタリアで開くことになった。私は、そのことを決めた総会ですぐ隣席にいたイギリスのマッセイに、「コペルニクス、ガリレオときたら、次はニュートンの番ですな」といったら、彼はニヤニヤしていたが、その時アルゼンチンの代表が立ち上って、「今からではすこし早いようですが1965年にはアルゼンチンへぜひ」という招請を行なった。

COSPAR の総会の方の主な仕事は、ワーキング・グループで行なわれる。現在のワーキング・グループは4つあるが、今回は更に2つ追加された。また、小委員長の要請で、ワーキング・グループ第1に、東京天文台の古在君が追加された。現在のワーキング・グループの名称と、わが国からの小委員は次のとおりである。

W.G. 1 Telemetry, Tracking and Dynamics. (畑中武夫, 古在由秀) (名称に Dynamics が追加された)

W.G. 2 for I.Q.S.Y. (前田憲一)

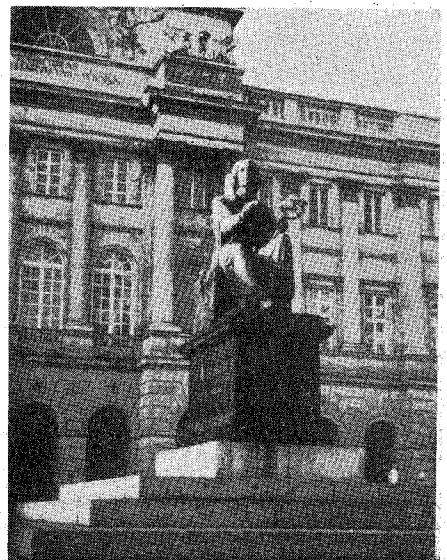
W.G. 3 Data Exchange and Publication. (青野雄一郎)

W.G. 4 International Reference Atmosphere. (米沢利之)

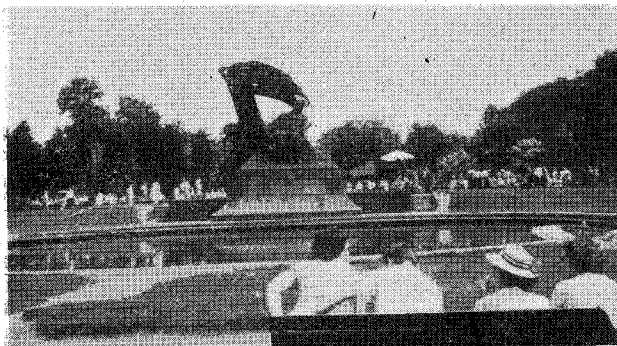
W.G. 5 Space Biology. (なし)

W.G. 6 Physics and Chemistry of Near Earth. (前田憲一)

COSPAR の委員長は、だいたい Union の代表から選ばれることになっている。現在は「力学」のロウ (フランス人) である。副委員長は米・ソ両国から1名づつ選



第4図 コペルニクスの像



第5図 ショパンの像のほりでの野外演奏会

ばれ、執行部はこの他4名あるが、それは、米・ソそれぞれが2名ずつの候補者を推薦することになっている。なかなかむずかしい会議である。これらの役員はすべて前期から留任ときまった。

☆ ☆ ☆

シンポジウムへの参加者は、総勢200名以上、提出論文も100に近かったと思う。参加者のうち、地元のポーランドはごく少数であったから、大部分は国外からである。アメリカの約100名の次は、フランスが25名くらいの代表団を送りこんだ。また大使館でのリセプションは、ソ連とフランスであった。フランスは大いに気に入れているらしい。

シンポジウムの論文をこまかく紹介することはとてもできない。印象深かったのは、1つは金星ロケット・マリナー2号が測定した太陽系内でのプラズマである。これはいつも太陽から吹いているらしく、その速度は、300 km/sec から 800 km/sec まで変わったが、その速度が、地球上での地磁気擾乱の指数 (K-index) ときわめてよい相関を示している。まことにみごとであった。

追加のなかに、アメリカの海軍研究所のフリードマンたちのX線の話があった。昨年夏前に、MITグループが、月からのX線を測ろうとロケットを上げ、月よりもずっと強いX線の源が、「銀河の中心方向にある」ことを見出したと報告した。フリードマンたちは、感度も分解能もよりよい装置でついこのあいだロケット観測をしたところが、こんどは2つの源が見つかった。1つは、「さそり座」にありかなり拡がった源、他は「おうし座」でかなり小さな源。そして後者の場所は、どうやら「かに星雲」に一致するらしいとのことであった。「さそり座」の源は、去年の観測でいう「銀河の中心方向」とよく似ている。

☆ ☆ ☆

会期中のある夕方、ワルソウ放送局にたのまれてテレビに出演した。ワルソウのテレビはチャンネルが1つ。そして毎日午後5時から午後10時までしかやらない。

私たちの放送は、7時20分から30分間のナマ放送であった。全体の委員長のロウ(フランス人)、ソ連代表のブラゴンラポフとマセヴィッチ、アメリカ代表のポーターそれに私と、地元代表のゾンとの6人であった。インタビューする人は、1人はフランス語を、1人はロシア語を、1人は英語をそれぞれしゃべり、全体の司会をする人が別にいた。私たちがそれぞれの言葉でしゃべっているときに、別室で同時通訳をして流すのであった。

「今日は大変な国際的放送だから、みんなはりきります」と、放送局の人々はいついた。私に対する質問は、「来年の東京オリンピックの人工衛星によるテレビ中継の可能性をどう考えるか」というようなことであった。私は適当に答えておいたが、アメリカのポーターに対する質問のうち、「米ソの宇宙協力についてどう思うか」という質問に対しては、「かなり具体的なりきめができた。近いうち(a few days)にその発表があるだろう」と答えていた。(これはごく最近発表された)

もう1つ、「ポーランドで会議を開いたことに対する印象」というような質問に、ポーターは、私がこの文のはじめの方で引用した、ゾン教授の開会の辞の別のところを引用して答えた。すなわち

「もう1つポーランド人のもつ矛盾は、日々の生活に追われながらも、とくに科学を好むことである。それは科学が、もっとも信頼すべき真実の源であるためだけではない。科学者の世界が、国籍も、皮膚の色も、社会的地位も知らないからである。そこには国境も、査証も、税関もない。必要な旅券は、1つか2つの外国語だけなのである……」

☆ ☆ ☆

6月3日から12日までの会議を終えて、6月13日にアムステルダムへ、そして6月14日の午後アムステルダムから北極まわりで帰途についたが、考えてみればちょうどそのころ、ポストーク5号が打ち上げられたのであった。ワルソウで一緒だったソ連の人々は、このことについては何のそぶりも見せていなかった。